

ストを行った後、表面処理はRocatec R-Plus処理、Rocatec R-Plus+シランカップリング処理、イトロ処理、イトロ処理+シランカップリング処理の4種類の表面処理を行った試料に、ポーセレンライナーM、クリアフィルフォトボンド、モノボンドプラス、セラミックプライマー、ユニバーサルプライマーの5種の各プライマー処理を行い、グラディアRを築盛し剪断接着試験を行った。得られた結果をKruskal Wallis H-test後に、Mann Whitney U-test with Bonferroni correction ( $P<0.05$ ) にて多重比較検定を行った。

【結果と考察】ロカテック処理法とイトロ処理法を比較した場合、ポーセレンライナーM、クリアフィルフォトボンドでは有意差は認められなかった。モノボンドプラスの場合、ロカテック処理ではイトロ処理法と比べ有意に高い値(25.48MPa)を示した。セラミックプライマーの場合、ロカテック処理と比べイトロ処理法の方が有意に高い値(27.31MPa)を示した。ユニバーサルプライマーの場合、イトロ処理単体ではロカテック処理と比べ有意に低い値(8.54MPa)を示したが、イトロ処理とシランカップリング処理を併用した場合、ロカテック処理と比べ有意に高い値(30.03 MPa)を示した。この結果よりジルコニアとハイブリッドセラミックスの併用にはロカテック処理ではシランカップリング処理+モノボンドの併用が、イトロ処理ではシランカップリング処理+ユニバーサルプライマーの併用が有効と考えられる。

## 7) 診療録整備委員会の業務

○清野 晃孝, 杉田 俊博, 佐藤 穂子  
濱田 智弘, 原田 卓哉, 高橋 和裕  
(奥羽大・歯・附属病院)

【目的】本院では、適切なレセプトの作成を目的に診療録整備委員会を設け、診療録の点検、レセプトの内容検査、審査支払機関からの審査理由への対応、保険医に対する研修会の開催等の作業を毎月実施しているが、審査支払機関から査定が試されてきている。

そこで、医療環境向上のために査定内容を精査し、診療内容向上と診療録の適切な記載に結びつ

けることを目的にこの調査を行った。

【材料と方法】対象は、平成20年度から23年度までの4年間の本院医事課で管理・保管されている審査支払機関からの増減点連絡書、再審査等請求書および再審査結果連絡書であり、月別査定率(%), 査定項目およびその月別件数(個)を調査項目とした。

【結果】平成20年度から23年度の4年間の査定率の平均値は0.92%であった。査定項目は処置に関するもの(76件)、文書に関するもの(203件)であった。

【考察】福島県の平均値と比較して本院が高く、改善すべき課題であると認識できた。高査定率の要因は、保険医の保険診療ルールに対する理解不足と思われる、毎年新人保険医が参入することへの対応の不十分さが主因と考えられた。さらに保険医が診療録記載の理解不足および職員と保険医の意思疎通が図られていないことが影響していると推察できた。

そこで、これらの問題解決の一つの手段として体系的に統一された書式による診療録記載が必要と考え、客観的に医療行為を可視化するため、科学的な記録として診療録を作成できるPOS(problem oriented system)に基づいたPOMR(Problem Oriented Medical Record)を用いた教育を保険医へ実施する必要性を認識した。

## 8) 臨床研修歯科医師の進路

### —過去7年間の結果から—

○高橋 和裕, 杉田 俊博, 清野 晃孝, 佐藤 穂子  
鈴木 史彦, 金 秀樹, 山森 徹雄, 鎌田 政善  
(奥羽大・歯・附属病院・歯科医師臨床研修プログラム委員会)

【目的】歯科医師臨床研修制度の法制化後、本学プログラム委員会は、臨床研修後における就職指導も実施している。臨床研修歯科医の就職への意識を把握し、今後の指導に役立てるために平成18年度から24年度までの7年間の就職実態を経年的に調査した。

【調査方法】各年度の臨床研修開始時と修了時に、プログラム委員会で実施したアンケートや調査票から、研修年度、年齢および就職先を抽出したデータカードを作成した。対象年齢は24歳から30歳

以上の7段階に分けた。就職先は本学および他大学の助手および大学院、開業歯科医、他の4群とした。このデータを分析した結果、興味ある知見が得られたので報告した。分析にあたり、データカード作成者と分析者は別人とした。

### 【結果】

1. 平成18年から24年度までに本学で臨床研修を終了した歯科医師は307人であった。

2. 平成18・19年度は24歳の研修医が本学に多く就職していた。

3. 平成20・21年度は24歳の研修医が開業医に就職する傾向がみられるようになった。

4. 平成22年度は東日本大震災の影響で修了時における就職未定者が多くみられた。

5. 平成23・24年度は24歳の研修医が減少し、25歳以上の研修医が多い傾向となり、開業医への就職率も増加した。

## 9) The Interaction between *Fusobacterium nucleatum* and Erythrocyte Impacts on the Host Innate Immune System.

○米田 早織

(奥羽大・歯・口腔細菌学)

*Fusobacterium nucleatum*は偏性嫌気性グラム陰性桿菌でヒトの常在菌である。主に口腔や大腸等に存在する日和見菌で、歯周病関連菌と考えられている。この*F. nucleatum*の興味深い特徴として、上皮細胞、血球、細菌など多くの原核及び真核細胞と非特異的に凝集する事が知られている。しかし、凝集が*F. nucleatum*に与える影響は知られていない。今回、我々は感染炎症進行時の指標の一つである出血(赤血球)と*F. nucleatum*の凝集に着目しその影響を検討した。

予備実験において、我々は赤血球と共凝集時、*F. nucleatum*の形態が変化する事を確認した。次に、我々はDNA-マイクロアレイ解析を用いて赤血球と*F. nucleatum*共凝集後の遺伝子発現変化を網羅的に分析した結果、10遺伝子の変化を確認した。これら10遺伝子の発現をReal-Time PCR法にて再度確認したところ、赤血球と共凝集した*F. nucleatum*は、共凝集していない*F. nucleatum*に比べFN1472(シアル酸結合タンパク質)の発

現量が5倍以上高かった。シアル酸は動物細胞が表層に持つ糖質で、細菌やウイルスはシアル酸結合タンパク質を介して細胞表層と付着する。また数種類の細菌が動物細胞表層のシアル酸と結合し、マクロファージの貪食から回避することが過去の報告よりわかっている。そこで、我々はコントロール(*F. nucleatum*のみ感染)群 n=3、対照(赤血球凝集後の*F. nucleatum*感染)群 n=3をそれぞれWax Wormに感染を行う事により、共凝集の初期免疫経路への影響を検討した。結果、対照群のWax Wormはコントロール群と比較して全て強い炎症反応がみられた。

以上の結果から、*F. nucleatum*は赤血球と凝集することによって、遺伝子発現が変化し、その結果、宿主の初期免疫経路を回避する可能性が示唆された。この現象は、歯周病進行時に増加する*F. nucleatum*の生存策略を表しているのかもしれない。

## 10) 当科における口腔悪性腫瘍症例に対する構音評価に関する臨床的検討

○吉開 義弘, 宮島 久, 竹内 聡史, 御代田 駿

吉田 綾子, 菊地 祐子, 重本 心平

(会津中央病院・歯科口腔外科)

【緒言】口腔は構音や摂食などの機能を持つ臓器で、口腔内に出来る病巣は少なからず、これらの機能を障害する。特に口腔がんは、手術をした場合、切除範囲が広がることも多く、腫瘍そのものによる障害も出やすい。近年、これらの障害に対する機能評価のひとつとして構音評価が行われるようになってきた。そこで今回演者らは、まず第1報として、術前評価として構音評価を行った口腔悪性腫瘍症例に対して、部位や大きさなどの関連について検討を行ったので、その概要を報告した。

【対象】平成23年4月から平成25年3月までの2年間に当科で手術を施行した33例の悪性腫瘍患者のうち、術前に言語聴覚士(以下ST)による構音機能評価を施行した患者24例とした。年齢41-83歳、平均69.1歳。男性10名、女性13名。上顎歯肉8例、舌7例、頬粘膜5例、口腔底2例、口蓋2例。T1 10例、T2 10例、T3 3例、T4 1例。